

銀座
アルパス

寺田寅彦作



昭和二十四年十月二十日 初版印刷
昭和二十四年十月三十日 初版發行

銀座アルプス

定價 三百三十圓

著作者 寺田寅彦
テラダ トラヒコ

發行者 角川源義
會員番號A二一〇〇二

印刷者 山田 一雄
東京都西多摩郡震村根ヶ布三八五

發行所 角川書店
カドカハ ショテン
東京都千代田區代官町二國際文化
會館內 振替東京一九五二〇八

寺田寅彦著

銀座ア

銀座
アル
プス

目次

伊太利人	7	解のやうな象	133	スエーデン	271	七
まじよりか皿	14	鏡屑	139	ロフノールに其他	276	一四
電車と風呂	22	流言蜚語	153	北海の氷の破れる音	281	三
田園雜感	31	議會の印象	158	鉛筆がける音	287	三
鼠と猫	43	路傍の草	165	銀座のブルース	292	四
或る日の經驗	71	断片Ⅱ	181	珈琲哲學序説	313	七
夢	81	備忘録	186	空想日録	322	八
断片Ⅰ	87	二科狂想行進曲	220	病院風景	341	八
雜記	92	化物の進化	223			七
或る幻想曲の序	123	野球場時代	240			三

伊太利人

今日七軒町迄用達しに出掛けた歸りに久し振りで根津の藍染町を通つた。親友の黒田が先年迄下宿して居た荒物屋の前を通つた時、二階の欄干に青い汚れた毛布が干してあつて、障子の少し開いた中に皺くちやに吊した袴が見えて居た。なんだかなつかしいやうな氣がした。黒田が此處に居たのはまだ學校に居た頃からで、自分は殆んど毎日のやうに出入したから主婦とも古い馴染ではあるが、黒田が居なくなつてからは妙に疎くなつてしまつて、今日も店に人の居なかつたのを却つて仕合せに聲もかけずに通り過ぎた。併し此家の二階は何となくなつかしい、昔の香がする。二階と言つて別に眺望が佳いのもなければ、座敷が綺麗だといふ譯でもない。前にはコケラ葺や、古い瓦屋根に草の茂つた貸長屋が不規則に並んで、其向ふには洗濯屋の物が干が美しい日の眼界を遮ぎる。右の方に少し許り空地があつて、其の眞上に向ヶ岡の寄宿舎が聳えて見える。春の頃など夕日が本郷臺に沈んで赤い空に此の高い建物が紫色に浮き出して見

える時などは、之れが一つの眺めになつた位のものである。しかし間近く上野をひかへて居るだけに、何處か明るい花やかな處もあつた。花の時分などになると何となく春のどよみが森の空に聞えて窓の下を美しい人の群が通る事もあつた。欄干にもたれて何かしんみりした話でもして居る時、程近い時の鐘が重々しいうなりを傳へて遠くに消えることもあつた。

一體黒田は子供の時分から逆境に育つて随分苦しい思ひをして來た男だけに世間に對する考へもふけて居て、深い眼の底から世の中を横に睨んだ様な處があつた。觀察の鋭いそしていつも物の暗面を見たがる癖があるので、人からは寧ろ憚られて居た爲か、平生親しく往來する友も少かつた。其のひねくれた様な處が妙に自分と氣が合つたのも不思議である。自分はどうかかうか世間並の坊ちやんで成人し、黒田の様な苦勞の味をなめた事もない。黒田の昔話を小説の様な氣で聞いて居た。月々郷里から學資を貰つて金の心配もなし、此上氣樂な境遇はなかつた筈であるが、若い心には氣樂無事だけでは物足りなかつた。きまり切つた日々の課業をして暇な時間を無意味に過すと云ふ様な事が寧ろ難い苦痛であつた。唯何かしら絶えず刺戟が欲しい。快樂とか苦痛とか名の付く様なものでなく、何んだか分らぬ目的物を遠い霞の奥に望んで、それをつかまへようつかまへようとして居た。小説を讀んだり白馬會を見に行つたり又音樂會を聞きに行つたりして居る内には求めて居る物に近づいた様な氣がする事もあつたが、

つい眼の前の物に手の届かぬ様な悶かしい感じが残る許りである。こんな事を話すと黒田はいつも快く笑つて「青春の贅澤」は出来る時にして置くと言つた。半日も下宿に籠つて見厭きた室内、見厭きた庭を見て居ると堪へられなくなつて飛出す。黒田を誘うて當もなく歩く。咲く花に人の集る處を廻つたり殊更に淋しい墓場杯を尋ね歩いたりする。黒田は之れを「浮世の匂」をかいで歩くのだと言つて居た。一緒に歩いて居ると、見る物聞く物黒田が例の奇警な觀察を下すのでつまらぬ物が生きて来る。途上の人は大きな小説中の人物になつて路傍の石塊にも意味が出来る。君は文學者になつたらいいだらうと自分は言つた事もあるが、黒田は醫科をやつて居た。

あの頃よく話の種になつた伊太利人がある。名をデュセッポ・ルツサナとかいつて、黒田の宿の裏手に小さな家を借りて何處かの語學校とかへ通つて居た。細君は日本人で子供が二人、末のはまだほんの赤ん坊であつた。下女も置かず、質素と云ふよりは寧ろ極めて賤しい暮らしをして居た。日本へ來て居る外國人には珍しい下等な暮らしをして居たが、しかし月給は可也澤山に取つて居るといふ噂であつた。日本へ來て居るのは金をこしらへる爲めだから、なんでも出来るだけ儉約するのですと彼自身人に話したさうである。

黒田の居た二階の縁側に立つて見ると、裏の堀越しに伊太利人の家の庭から縁側が見下され

る。二間あるかなしの庭に、植木といつたら柘榴か何かの見すばらしいのが一株塀の陰にある許りで、草花の鉢一つさへない。今頃なら霜解を踏み荒した土に紙屑や布片などが淺猿しく散らばりへばりついて居る。晴れた日には庭一面におしめやシャツの様な物を干す、軒下には罐詰の穀やら横緒の切れた泥塗れの女下駄などがころがつて居る。雨の日には縁側に乳母車があがつて、古下駄が雨垂れに濡れて居る。家の中迄は見えぬがきたなさは想像が出来る。細君からして随分此んな事には無頓着な人だと見える。どうせあんな異人さんのおかみさんになる位の人だからと下宿の主婦は説明して居たさうな。しかし細君は極く大人しい好人物だといふので近所の氣受けは餘り悪い方ではなかつたらしい。

主人のデューセツポの事を近所ではデューちゃんと呼んで居た。出入の八百屋が言ひ出してからみんなデューちゃんといふ様になつたさうである。自分は折々往來で自轉車に乗つて行くのを見かけた事がある。大きなからだを猫背に曲げて陰氣な顔をしていつでも非常に急いで居る。肩の間に深い皺をよせ、血眼になつて行手を見つめて驅けつて居るさまは餓ゑた熊鷹が小雀を追ふ様だと黒田が評した事がある。休日などはよく縁側の日向で赤ん坊をすかして居る。上衣を脱いでシャツばかりの胸に子供をシツカリ抱いて、をかしな聲を出しながら狭い縁側を何遍でも行つたり來たりする。そんな時でも恐ろしく眞面目で沈鬱で一心不亂になつて居る様に見

える。こちらの二階で話し聲がして居ても少しも目もくれず、根氣よく同じ様な聲を出して子供をゆすぶつて居る。併し子供が可愛くてならぬといふ風でもない。唯一心に何事かに凝り固まつて世間の風が何處を吹くのも知る餘裕がないといった様である。自分は此んな場合を見かけるとなんだか可笑しくもあり又氣の毒な氣がした。黒田はあれは此の世界に金を溜める以外何物もない憐れな男だと言つて居た。五厘だけ安いといふので石油の罐を自轉車にぶらさげ、下谷の方まで買ひに出かけるといふ事であつた。八百屋などが來ると自分で臺所へ出かけてやかましく値切り小切りをする。大根を齒で喰ひ缺いて見て此れはいけないと云つて突返したりする。煮焚の事でも細君にはやらせないで獨りで臺所で何かガチャつかせながらやつて居た。

花を尋ねたり、墓を訪うたり、美しい夢ばかり見て居たあの頃の自分には、此の伊太利人は暗い黄泉の闇に荒金を掘つて居る亡者か何かの様に思はれた。兎に角一種侮蔑の念を抑へる譯に行かなかつた。日露戦争の時分には何でも露西亞の方に同情して日本の連捷を呪ふやうな口吻があつたとかで或は露探ぢやないかといふ噂も立つた。こんな事でひどく近所中の感じを悪くしたさうだが、細君の好人物と子供の可愛らしいのとで幾分か融和して居たらしい。子供は髪が黒くて色が白くて美しい。上の男の子はあの頃四つ位で名はエンリコとかいふさうだが、當り前の和服を着て近所の子供と遊んで居るのを見ては混血兒と思はれぬ様であつた。黒田は

此兒を大變に可愛がつてエンチャン／＼と親しんで居た。父親が金をこしらへあげた曉に此兒の運命はどうなるだらうかと話し合つた事もある。

デュセツポの家で時ならぬ嵐が起つて隣家の耳を敬てさせる事も珍しくない。アクセントのかしい伊太利人の聲が次第に高くなる。そんな時は細君のことをアナタが／＼と云ふ聲が特別に耳立つて聞える。嵐が絶頂になつて、おしまひに細君の啜り泣きが聞え出すと急に黙つてしまふ。そして赤ん坊を抱いて下駄ばきで庭へ出る。憤怒、悲哀、痛苦を一まとめにした様な顔を曇らせて、不安らしく庭をあちこち歩き廻るのである。異郷の空に語る者もない淋しさ佗しさから氣まぐれに拵へた家庭に憂き雲が立つて心が騒ぐのだらう。こんな時にはかたくななデュセツポの心も、海を越えて遙な伊太利の彼方、オレンヂの花咲く野に通うて羈旅の思が動くのだらうと思ひやつた事もある。細君は珍しいおとなしい女で、口喧ましい夫にかしづく様は寧ろ人の同情をひく位で、つひぞ近所などで愚痴をこぼした事もない。従つて此の變つた家庭の成立に就いても細君の元の身分に就いても、何事も確な事は聞かれなかつた。今は黒田も地方へ行つてしまつて伊太利人の話をする機會も絶えた。

こんな事を色々思ひ出して歸つて來ると宅のきたないのが今更の様に目に付く。よごれた疊破れた建具を見まはして居たが、急に思ひついて端書を書いた、久し振りで黒田にこんな事を

書いてやつた。

……東京は雪がふつた。千駄木の泥濘はまだ乾かぬ。之れが乾くと西風が砂を捲く。此泥に重い靴を引きずり、此の西風に逆ふだけでも頬が落ちて眼が血走る。東京はせちがらい。君は田舎が退屈だと言つて來た。此頃は定めて益々肥つたらう。僕は毎日同じ帽子同じ洋服で同じ事をやりに出て同じ刻限に家に歸つて食つて寝る。「青春の贅澤」はもう止した。「浮世の匂」をかぐ暇もない。障子は風がもり、疊は毛立つて居る。霜柱にあらた庭を飾るものは子供の襦袢位なものだ。此頃の僕は何だか段々に變つて來る。美しい物の影が次第に心から消えて行く。金がほしくなる。かつて二階から見下したデュセッポにいつの間にか似て來るやうだ。墮落か、向上か。どちらか分らない。三月十四日

ペンで細字で考へ／＼書いてしまつたのを懷にして表のポストに入れに出た。そして今書いた事を心でもう一遍繰り返しながら、此れを讀んだ時に黒田の苦い顔に浮ぶべき微笑を胸に描いた。

(明治四十一年四月、ホトトギス)

まじよりか皿

十二月卅一日、今年を限りと木枯の強く吹いた晩、本郷四丁目から電車を下りて北に向うた忙がしい人々の中に唯一人忙がしくない竹村運平君が交じつて居た。小さい新聞紙の包を大事さうにかゝへて電車を下りると立止つて何かまご／＼して居たが、薄汚い襟巻で丁寧に頸から頤を包んでしまふと歩き出した。ひよろ長い支那人のやうな後姿を辻に立つた巡査が肩章を聳かして寒さうに見送つた。

竹村君は明けると卅一になる。四年前に文學士になつてから、しばらく神田の某私立學校で英語を教へて居た。受持の時間に竹村君が教場へはひるときに首席に居る生徒が「氣を付け」「禮」と號令をすると生徒一同起立して恭しくお辭儀をする。そんな事からが妙に厭であつた。そして自分にも碌に分らないやうな事をいゝ加減に教へて居ると、次第々々に自分が墮落して行く様な氣がすると云つて居たが、一年ばかりでとう／＼止してしまつた。さうして月給がな

くなつて困る困るとこぼしながらぶら／＼して居た。地方の中學に可也に好い口があつて世話しようとした先輩があつたが、田舎は厭だからと素氣なく斷つて了つた。何故田舎が厭だと人が聞くと、田舎は厭ぢやないが田舎の「先生」になつてしまふのが厭だからといった。夫れで相變らず金を取らなくちや困るといつてこぼして居た。其後一時新聞社へもはひつて居た。半年位通つて眞面目に働いて居たが、自分の骨折つて書いたものが一度も紙上へ載らないので此方も出てしまつた。此頃ではあちこちの翻譯物を引受けたり、少年雑誌の英文欄などを手傳つて、どうかかうかはやつて居る。時々小説のやうな物を書いて雑誌へ出す事もあるが、兎角の評判もないやうである。自分の小説が何かに出ると、方々の雑誌屋の店先で小説月評といった様な欄をあさつて見るが、いつでも失望するにきまつて居た。

根津邊の汚い下宿屋で極めて不規則な生活を送つて居る。一日何もしないで煙草ばかり吹かして寝たり起きたり四疊半に轉がつて居る事もあれば、朝から出掛けて夜の二時頃迄歸らぬ事がある。さうかと思ふと二三日風呂にも行かず夜更迄机へすがつた切りでコツ／＼何か書いたり讀んだりする。そんな時はいかにも苦しさうな溜息ばかりして何遍となく便所へはひつて大きな欠伸をする癖がある。朝は大概寢坊をして、之が爲めに晝飯を抜きにする事があるが、其代りに夜の十時頃から近所の牛肉屋へ上つて腹一杯に食ふ事も珍しくない。一體に食ふ方に